JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	英国の大学評価REFにおける研究インパクト : 人文社会科学系研究の事例
Author(s)	島岡, 未来子; 小林, 直人; 古賀, 康之; Yu, Lily; Higginson, John
Citation	年次学術大会講演要旨集, 31: 186-190
Issue Date	2016-11-05
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/14039
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

１Ｇ０３

英国の大学評価ＲＥＦにおける研究インパクト：人文社会科学系研究の事例

○島岡未来子/Mikiko Shimaoka、小林直人/Naoto Kobayashi、
古賀康之/Yasuyuki Koga（早稲田大学）、
Lily Yu、John Higginson （DART Partners）

要旨： 人文社会科学系研究の社会的意義の議論は、研究をいかに評価するか、とりわけ社会に与える影響、インパクトをいかに評価するかの議論と表裏一体である。本研究では、人文系の研究について、英国の大学評価 the Research Excellence Framework (REF)に、2014 年に提出されたインパクトのケーススタディをバーミンガム大学のシェイクスピア研究を対象に分析し、人文系研究のインパクト評価における傾向を予備的に考察した。3 件のケーススタディからは次の特徴を抽出した。1)研究者の実績の念入りな記述、2)有名な大学出版からの著作や研究資金実績の強調、3)インパクトの対象者として学術界以外の人々の強調、4)指標は定量と定性が混在。定量的なものは観客数や Web ページや SNS などの比較的単純なアウトプットが記載。定性的なものは、外部からの評価コメント等の直接的な引用、である。国際共同研究にあたっては、共同の相手側がいかなるアウトプットを求めているかを知ることが双方に益をもたらし、モチベーションを保つために重要である。REF のインパクトケーススタディは、国際共同研究推進の際、英国の大学が何をアウトプットとして求めているかを知るために有用な情報となることが示唆される。

1. はじめに

近年、人文社会科学系の研究が有する社会的意義について、国内外における議論が盛んになっている[i]。2015 年 6 月 8 日の文科省通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」は、第 3 期中期目標・中期計画の策定にあたって、人文社会科学系の学部・大学院の廃止や転換に求める、とし[ii]、国内外に様々な論議を呼んだ。これに対して、国内 11 の国立私立大学から成るコンソーシアムである学術研究懇談会(RU11)は、「人文・社会科学は、自然科学などが担うイノベーションの成果を社会実装するうえで不可欠であることにとどまらず、より根源的な価値を社会に提起する学問としてとらえるべき」とし、人文社会科学系の研究が有する社会的意義について提言を行っている[iii]。

人文社会科学系研究の社会的意義の議論は、人社系の研究をいかに評価するか、とりわけ社会に与える影響、インパクトをいかに評価するかの議論と表裏一体である。本研究では、その議論に資するべく、特に評価が困難であるとされる人文系の研究について、英国の大学評価 the Research Excellence Framework (REF) に 2014 年に提出されたインパクトのケーススタディを分析し、人文系研究のインパクト評価における傾向を予備的に考察する。

2. REF におけるインパクトとは

REF は、研究のインパクト(以下インパクト)を「経済、社会、文化、公共政策やサービス、健康、環境や生活の質の変化または便益に資する、学究的な世界を超えた影響」(REF:2011)と定義している[iv]。REF は、研究システム全体にインパクトが適用された最初の例である。（Morgan Jones and Grant, 2013）[v]。インパクトの重みは 2014 年総合評価では 20%であった。将来的には 25%に増加すべし、との意見もある(Witty, 2013)[vi]。また、今後 5 年間で、合計で約 16 億ポンドの公的資金がインパクトのケーススタディによって決定される予定であり[vii]、インパクト評価は英国の研究評価と資金配分において極めて重要な情報源となる。

インパクト評価では、次の 5 つのセクションから成る 4 ページのケーススタディ文書の提出が各機関に求められている。すなわち(1)インパクトの概要(Summary of the impact)、(2)基盤となった研究成果(Underpinning Research)、(3)研究にかかる参照情報(References to the research)、(4)インパクトの詳細(Details of the impact)、(5)インパクトを裏付ける情報源(Sources to corroborate the impact)である。各ケーススタディは、次の 2 つの基準を用いて評価される。(1)リーチ ・ 関係者への影響や効果の広が

りまたは幅、(2)意義 ・ 強さ、影響、効果、である。

3. 本研究の分析視点と手法

2014 年の REF に提出されたケーススタディのうち、パネル D に分類される人文系(Arts and humanities)のケーススタディは、23.6%(1647 件)であった[viii]。本研究では、そのうち、特にバーミンガム大学(以下 UoB)が提出した、シェイクスピア関連の 3 ケーススタディを取り上げる。UoB は、シェイクスピア研究において世界的に著名なシェイクスピア研究所を擁し、当該研究で世界をリードする機関である。このような第一線の研究機関が、いかに情報を整理し、インパクトとして提出しているかは、人文系のインパクト評価を分析するうえで有益な示唆を考えられるからである。さらに、筆者の所属する大学は、2015 年度より UoB シェイクスピア研究所との組織的な研究連携をスタートさせた[ix]。大学経営の観点から、いかにインパクト評価情報を国際共同研究に活用し得るかについても、予備的な分析を試みる。

4. バーミンガム大学の REF 対応戦略

REF は各大学に多くの資料提出を求める。そのため大学側の負担は大きい。UoB は、REF のインパクト評価をいかに受け止め、いかに対応したのであろうか。筆者は UoB の Matthew Hilton 教授(歴史学部 /REF 評価パネルメンバー)と、Elizabeth Westlake 氏(研究計画室副所長)にヒアリング調査を行った(2016 年 3 月 8 日実施)。調査結果の概要は次のとおりである。

・REF のインパクト評価の意義：REF のインパクト評価は、大学の研究にとって大学の研究戦略を再設定する好機となり、また公共の利益に資する研究の創出を促進することにもなっている。

・REF の実施には学内の強いリーダーシップが求められる。UoB には大学執行部に強いリーダーシップが存在した。これが組織的な取り組みを可能にした。

・インパクトの執筆は次のようなプロセスによって行われた。社会科学、人文系は分野によって指標は異なる。特に人文系インパクトは定量的計測が困難であるため、インパクトは記述（ストーリー）によって表現される。よいストーリーは高評価を得るために効果的である。さらに 1 ケーススタディあたり４ページと書ける内容は限られている。そのため高評価を得るには要旨が明快であることが鍵と考えた。これらの視点から UoB はケーススタディを 15 回書き直した。事例の抽出を含め準備プロセスには 18 か月かかった。最後の 6 か月間は、他の領域の専門家(資金の申請の書き方の専門家など)の参加もお願いした。

・インパクト評価については研究成果が実際のインパクトに繋がったことを明確なエビデンスにより実証しなければいけない。ある研究成果が商品化され売上があったことは明確なインパクトであったと言えようが、政策への反映、生活の質の向上など必ずしも定量的に評価できないものも多い。記述的な表現は助けになるが何等かのエビデンスが必要である。企業はデータを提供したがらない。そのため、日ごろからの企業とのネットワークと信頼構築が重要となる。非営利組織は、比較的データ提供に協力的である。研究者の個人的なつきあいにより政府や自治体から必要な情報を入手した例もある。

すなわち、UoB は、REF を大学の経営戦略の一貫に位置付け、強いリーダーシップのもと組織的に取り組んできた。その背景には、REF が大学の研究戦略の設定に寄与するという意識がある。定量的計測が困難であるインパクトについては、簡潔かつ良いストーリーを描くことに相当のエネルギーを費やしたことが分かる。また外部の専門家にも協力をもとめ、大学外の視点を入れることに配慮している。

5. バーミンガム大学のシェイクスピア研究にかかるインパクトの事例

インパクトの事例として、UoB シェイクスピア研究にかかる次の 3 つのケーススタディを抽出した。(1) 「オリンピック年におけるシェイクスピア議論」(D29 English Language and Literature)、(2) 「監督、俳優、観客のシェイクスピア作品の理解を促進する：シェイクスピア戯曲にかかるテキストのアドバイス、プログラム執筆、講演」(D35 Drama)、(3)「シェイクスピアのイングランドの物質的文化と文化遺産の伝承」(D30 History)である。評価ユニット(UOA)は、いずれも D(Arts and humanities)である。

3 事例のケーススタディ記述の概要を表 1 に示した。概要は次のようにまとめることができる。

(1)「インパクトの概要」については、中心的な研究者が明示されている。誰が、何のために、何をしたか、そのインパクトはなんだったのか、が簡潔に記述されている。特に、対象が学究的な世界のみならず、シェイクスピア演劇にかかる監督、俳優、そして観客、シェイクスピア・トラストの観光スポッ

トを訪れる観光客までが設定されている。想定される便益者において、パネルDは、他のパネルと比べて学生、子供、学校、コミュニティ、美術館、ジャーナリスト、執筆業、キューレターが多い[x]が、3つのケーススタディは、そのような受益者の存在を裏付けているといえよう。
(2)「基盤となった研究成果」では、「シェイクスピア研究所の実績」、「研究者の実績」、「プロジェクトに至る経緯」「リサーチ・クェスチョン」「ネットワーク」などが示されている。
これまでの研究の経緯、実績、研究者ネットワーク等が記述されている。
(3)「研究にかかる参照情報源」では、著名な大学出版社等からの著作、研究資金獲得、受賞などの情報が記載されている。
(4)「インパクトの詳細」は、定性情報と定量情報が両方示されている。たとえば、定量では、ホームページへのアクセス数、国数、ソーシャルメディア（Twitter,ブログ, Facebook のフォロアー/コメント/反応数、観客数、プログラムの配布数などがあげられている。定性情報では、監督/俳優/アーキビスト/一般の関係者等の関係者による評価コメントや SNS への書き込みが記載されている。
(5)「インパクトを裏付ける情報源」では、ウェブサイトの URL, キーパーソンのコメント、劇場によるデータ、監督、俳優によるコメント、SBT とバーミンガム大学間の正式合意文書、観光客調査、パートナー（SBT）の証言、アプリリリースを報じるウェブサイトがエビデンスとして示されている。

上記をまとめると、次のとおりである。事例では定量と定性の両方の情報が、インパクトを示すために用いられている。定量は主としてホームページへのアクセス数、SNS のフォロアー数、観客数などのイベントにかかるアウトプットが示されている。定量情報はそれほど複雑な情報が示されているわけではない。定性情報については、主要なステークホルダーの声、評価を引用している。

6. 考察とまとめ

3 件のケーススタディに共通する要素として次の 4 点をあげる。1)研究者の実績の念入りな記述、2)有名な大学出版からの著作や研究資金実績の強調、3)インパクトの対象者として学術界以外の人々が強調、4)指標は定量と定性が混在。定量的なものは観客数や Web ページや SNS などの比較的単純なアウトプットが記載。定性的なものは、外部からの評価コメント等の直接的な引用、である。

特筆すべきは、これらの点を評価できる評価者（パネルメンバー）の存在である。前述の UoB へのインタビューによれば、評価パネルは 4 つのメインパネル、36 の研究分野別のサブ-パネルから構成され全参加者は 1,052 名であるが、そのうちアカデミック界からは 77%、ユーザーは 23%である。UoB は、現状の比率は適切と考えている。ユーザーは、歴史分野であれば美術館の館長(大体博士号をもっている）や何等かの歴史への知見が深い人であり、アカデミアへの理解もある。すなわち評価者は、人文系のアウトプットやアウトカムの特徴について精通している人材が選出されている、といえる。

国際的な共同研究を進める際に、これらの情報はいかなる意義を有するだろうか。国際共同研究にあたっては、共同の相手側がいかなるアウトプットを求めているかを知ることが、双方に益をもたらし、モチベーションを保つために重要である。すなわち、今後筆者が所属する大学が UoB とのシェイクスピアにかかる共同研究を進めるにあたっては、UoB 側が上記で述べたアウトプット情報を重視していること、非アカデミックな世界へのリーチと影響を重視していることに留意することが、成功の鍵のひとつと言える。REF のインパクトケーススタディは、国際共同研究推進の際、英国の大学が何をアウトプットとして求めているかを知るために有用な情報となることが示唆される。

表１　バーミンガム大学がREFに提出したシェイクスピア関連の3ケーススタディの概要

	事例1	事例2	事例3
UoB (Unit of assessment)	D29 English Language and Literature	D35 Drama	D30 History
タイトル	オリンピック年におけるシェイクスピア議論	監督、俳優、観客のシェイクスピア作品の理解を促進する：シェイクスピア戯曲にかかるテキストのアドバイス、プログラム執筆、講演	シェイクスピアのイングランドの物質的文化と文化遺産の伝承
1.インパクトの概要/Summary of the impact	英国の2012年カルチュラル・オリンピアードにおける重要なイベントであった「世界シェイクスピア・フェスティバル」をめぐる新たな公的討論空間の創造。文化的な対話を促すオンラインフォーラムを共同で創設することにより、本プロジェクトは21世紀の文化におけるシェイクスピアと芸術の役割についての議論促進のみならず、シェイクスピアの最大の多文化祭典にかかる、唯一の、全面的な、批評的な、そして一般からのアクセスが可能なアカウントを制作した。本プロジェクトは、共創による研究とインパクトの例である。	Jacksonは、研究主導の洞察をシェイクスピア演劇にかかるテキストと演技の伝統に組み込むことで、監督と俳優のシェイクスピア演劇の専門性向上を涵養してきた。リハーサルでの連携、解釈とパフォーマンスの詳細なレベルでの作業を介して実現した。彼の研究はまた、観客の文化的な豊かさを強化した。	2007年以来、Tara Hamlingは、「シェイクスピア生家トラスト」(Shakespeare Birthplace Trust: SBT) と共同で、SBTの運営への研究組み込に取り組んできた。この共同は、博物館の専門家、SBTの訪問者、シェイクスピアとその時代に関心を寄せる世界の人々に、文化的な生活の領域において利益を与える影響をもたらした。
2.基盤となった研究成果 / Underpinning Research	・シェイクスピア研究所の実績 ・プロジェクトに至る経緯 ・リサーチ・クェスチョン ・ネットワーク	・Jackson教授の実績	・Tara Hamling 教授と共同研究者の実績
3.研究にかかる参照情報/References to the research	・論文や著作(4件) ・研究資金獲得（1件） （AHRC Award 39,422.80ポンド）	・著作等（6件） （ケンブリッジ大学出版、マンチェスター大学出版など）	・著作（2件） （イェール大学出版など） ・研究資金獲得（4件） AHRCによる助成、受賞など
4.インパクトの詳細 / Details of the impact	【公開討論の促進】 ・プラットフォームとなったホームページ www.yearofshakespeare.com のアクセス数、アクセスした国の数 ・ソーシャルメディア（Twitter, ブログ, Facebook）のフォロアー数、コメント数 【文化遺産の保存と実践への影響】 ・ホームページの影響力、唯一性 ・アーキビスト、著名な舞台監督などのキーパーソンによる評価コメント	【俳優と監督への情報提供、関連の印刷物等を通じた観客へ文化的な豊かさの提供】 ・観客数 ・監督/俳優による評価のコメント 【観客への文化的な豊かさの提供】 ・プログラムの配布数 ・講演	・学術界以外の観客のための文化遺産の解釈 ・博物館セクターでの専門家の手法やアイデアに影響。博物館や文化遺産の専門家が、変化する態度や期待への適応できるように支援 ・観光への刺激を開発。観光客の経験の質向上への貢献 ・新製品の開発（iPhone アプリ）の情報提供によりイノベーションと起業活動に貢献 ・SBT への専門アドバイス提供、関与
5.インパクトを裏付ける情報源 / Sources to corroborate the impact	・ウェブサイトデータ ・キーパーソンのコメント	・劇場データ ・監督、俳優によるコメント	・SBTとバーミンガム大学間の正式合意 ・観光客調査 ・SBTの証言 ・アプリリリースを報じるウェブサイト

出典：Search REF Impact Case Studies http://impact.ref.ac.uk/CaseStudies/,
事例1: http://impact.ref.ac.uk/CaseStudies/CaseStudy.aspx?Id=38892,
事例2:http://impact.ref.ac.uk/CaseStudies/CaseStudy.aspx?Id=38910,
事例3: http://impact.ref.ac.uk/CaseStudies/CaseStudy.aspx?Id=38897 をもとに筆者作成

[i]本文で示した以外にも次の提言等がなされている
・Leiden Statement; The Role of the Social Sciences and Humanities in the Global Research Landscape, announced by AAU, AEARU, LERU, GO8, Russell Group, U15 CANADA.(2014).
< http://media.leidenuniv.nl/legacy/leiden-statement.pdf >
・日本経済団体連合会(2015).「国立大学改革に関する考え方」
< http://www.keidanren.or.jp/policy/2015/076.html >
[ii]文部科学省(2015).「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて（通知）」
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/062/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2015/06/16/1358924_3_1.pdf >
[iii]RU11(2016).「自由な発想に基づく学術研究の拡充ならびに人文・社会科学系研究の推進について（学術政策）< http://www.nagoya-u.ac.jp/info/upload_images/2016ru1101.pdf >
[iv] REF (2011). Assessment Framework and Guidance on Submissions. REF 02.2011 (as of 28 July 2014) < www.ref.ac.uk/pubs/2011-02/ >
[v] Morgan Jones M, Castle-Clarke S, Manville C, Gunashekar S and Grant J (2013). Assessing Research Impact. An International Review of the Excellence in Innovation for Australia Trial. Cambridge: RAND Europe. < www.rand.org/content/dam/rand/pubs/research_reports/RR200/RR278/RAND_RR278.pdf >
[vi] Witty A (2013). Encouraging a British Invention Revolution: Sir Andrew Witty's Review of Universities and Growth – Final Report and Recommendations. London: Department for Business Innovation & Skills. < www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/249720/bis-13-1241-encouraging-a-britishinvention-revolution-andrew-witty-review-R1.pdf >
[vii] King's College London and Digital Science(2015) "The nature, scale and beneficiaries of research impact",<http://www.kcl.ac.uk/sspp/policy-institute/publications/Analysis-of-REF-impact.pdf >
[viii] King's College London and Digital Science (2015) (前掲)
[ix] 2016 年 4 月 5 日　早稲田大学ホームページ「早稲田大学・英バーミンガム大学が提携 共同研究を強化、推進：シェイクスピア研究など 4 つの分野からスタート」< https://www.waseda.jp/top/news/39775 >
[x] King's College London and Digital Science (2015) (前掲)